

〔目的〕ソテツの種子は沖縄地方において非常時の救荒食品のみならず、平常時においても主に味噌原料として用いられてきたが、猛毒のサイカシンが含まれていることから徹底した毒抜きが必須とされている。

ソテツ種子中の毒はサイカシンのみではなく、種子の破壊時にそれに含まれる β -glucosidase (β -G) の糖転移作用により様々なネオサイカシン類が生成することが指摘されている。ソテツの種子を材料とした食品の安全性をみる場合これらのネオサイカシン類についても考慮しなければならない。ここではネオサイカシン生成に及ぼす β -G の作用性について調べた。

〔方法〕各種条件でソテツの種子を処理し、サイカシン及びネオサイカシン類を抽出し、それらを分析した。分析は HPLC を用い、カラムは Shim-pak CLC NH₂、移動相は 70% アセトニトリル、検出は 215nm で行った。

〔結果〕サイカシン及びネオサイカシン類の分析パターンは抽出条件により大きく異なり、凍結後 4℃ で破碎抽出を行う方法が最も β -G の影響を受けず、常温抽出、あるいは酵素失活を目的としたオートクレーブ処理では、数多くのネオサイカシンが著量生成し、サイカシンは低い値となった。これらの結果よりサイカシンに限定した従来の安全性に対する評価は再検討する必要があることが指摘された。